

奄美出身者のアメリカ移住 ——喜界島、小野津出身者を中心に——

田 島 康 弘 *

Prewar Emigration of Amami People to U. S. A. — Laying Stress on Onotsu Village, Kikai Island —

Yasuhiro TAJIMA *

Abstract

This paper deals with the emigration of people from Amami to the U. S. A. and their life after that, laying stress on the people of Onotsu village, Kikai Island. In the early twentieth century, the Amami islands were in needy circumstances and each family had many children. Many Amami people went to Osaka and, later, to Tokyo to work after graduating from primary school. Many of them became factory workers in Osaka, but some became seamen, especially those from Onotsu village. For the purpose of making money some of these seamen went to work in the U. S. A. where conditions were very good. About 70 to 80 of them were from Onotsu. Most of those who went to the U. S. A. returned after saving some money, but some of them came back penniless or were forced to return. While working in the U. S. A. about a fifth of them decided to settle there after the war. Some of them succeeded in the restaurant or agricultural businesses. In the middle of the 1920s emigrants had already formed a group and after the war, residents formed the Onotsu group in the New York area and promoted mutual friendship. But this group became inactive and changed from because of the advanced age of its members. It seems that one factor of their strong mutual relation is the blood relationship of their group.

Key words: Amami People, Seaman, Emigration, Emigrant Life, Group Formation.

* 鹿児島大学教育学部地理学教室

Department of Geography, Faculty of Education, Kagoshima University,
Korimoto 1-Chome, Kagoshima 890, Japan

第1章 研究目的

本稿は、主に第2次世界大戦前アメリカに渡った奄美出身者の渡米家庭およびその後の生活などについて、筆者が現在までに把握、理解した範囲で整理し、まとめたものである。

従来、筆者は奄美出身者の国内大都市部への人口移動と都市部における集団形成、彼等が出郷したあとの母村の変容等に興味を持ち、報告を行なってきたが¹⁾、これを行う過程で、彼等の一部が海外特に北米にかなり渡っているという事実を知るようになった。

奄美出身者の行先は、東京も少なくないが全体としてみると大阪・関西が多く、とくに初期においてはそうであった。大阪へ出た者では工員になる者が多かったようであるが、船員になった者も一部いた。彼等の中には、第1次大戦当時景気の良かったアメリカを目標として「出稼ぎ」を試みる者があり、この出稼ぎ者の中で、そのままアメリカに住みついて定住する者さえ生れた。

本稿は、以上のような経過およびその結果等について、喜界島小野津の場合を中心に報告しようとするものである。言い換えると、奄美出身者の渡米の実態を、歴史的経過に沿ってできるだけ具体的に明らかにすることが、本研究の目的である。

一般に、沖縄からのハワイを含むアメリカ等への海外移住についてはよく知られているが、奄美出身者の海外移住については、従来ほとんどその報告がなく、事実そのものすら把握されておらず統計類なども皆無である²⁾。従って、以上の目的を明らかにするためには、関係者からの聞き取りを柱とし、彼等の所持している諸資料や彼等自身が出版した書物、奄美関係の雑誌などを参考資料として聞き取りと併せて使用し、整理の手掛かりとした。

第2章 小野津人とアメリカ

喜界島では、大正期頃から貧困や生活の苦境を打解するため、大阪方面次いで東京方面への出稼ぎ者が多くなってきたこと、そして、このうち阪神方面の出稼ぎ者の中で、とくに小野津出身者には船員になる者が多かった事を筆者は別稿で述べた³⁾。また、1938（昭和13）年7月時点でアジアに37名（1887年から1922年までの36年間における全出郷者488名の7.6%）、アメリカに33名（同じく6.8%）の海外出郷者がいることもみた。本章では、以上のような小野津と海外、特にアメリカとの関係について考察してみよう。

第1節 上阪、船員、渡米

まず、当時の小野津の人々は、外国とくにアメリカに対してどのような気持ちを抱いていたのであろうか。この点について「年輪」⁴⁾に次のような文章がある。当時「貧困からの脱出という形で、島民は、特に、次男、三男はこぞって他国に出て行った時代」⁵⁾であったと。また、当時の自分の気持ちを「世は明治、大正、昭和と変わりゆけど小野津びとは昔から浜上謙翠翁を始めとして海や船や海外に非常に縁が深く、若者達が大正の初期頃より北米に渡ったり、向こうでがっちりと働いて郷里に沢山送金するので、小学生の頃よりアメリカ行くのを志して居りました」⁶⁾と述べる者がいたようにアメリカへの指向性が強かったのである。同時にこの文章から、大正の初期というかなり早くから、北米に渡り金をか

せいで沢山送金してくる者がいた事がわかる。

それでは、彼等はなぜ北米に渡るようになったのだろうか。それは第1次世界大戦前後におけるアメリカ社会の好景気に引き付けられたという側面が大きいであろう。当時は、日本でも「第一次欧州大戦の日本歴史に残るあの好景気は、それこそ、一夜にして数万の金を儲けると言った成金が生まれ、いわゆる成金なる新語を流行らせた程でしたから、何か世の中全体がうわついた時代」⁷⁾だったのである。彼らにとっては、景気の良い国アメリカへ行きさえすればよく、この点で「船乗り」の職はまことに打って付けであったと言える。アメリカへ行くために船乗りになった者さえおり、彼らは「アメリカコースのある会社ならこの会社でもよく」⁸⁾、仕事に就いてからもひたすら北米航路がまわってくるのを待ち、そのチャンスが来て「船がアメリカに着くと山へ逃げ、2～3日たって船が出たのを確かめてから街へ出てくる」⁹⁾のであった。

以上のことは、喜界島全体について述べた次の文章からも読み取れる。「阪神方面への出稼ぎ者は大阪鉄工所等工場労働者が多く、また下級船員として、内外航路の客船、貨物船に乗り込む者も多かった。中にはひそかに渡米を志し、密航に成功して現在米国で裕福な生活をしている者も多数ある。特に小野津方面にそれが多かった。初期の彼等の考えは早く金をためて故郷に帰ることであり、送金も多額に昇ったが、時の経過とともにアメリカに住みつ়ことになったのである」¹⁰⁾。ここには、密航に成功したあとの「金かせぎ」や「送金」の段階から、「住つき」の段階への移行過程についても述べられている。

大正末期の状況については、次の文章が良く伝えている。「小野津出身は早くより海外に発展し幾多の成功者を出している。而して海員のみでも四千噸級の汽船の二三隻位の乗組員は同地出身者のみで出し得るという程の多数を占め、アメリカ丈けにも三十六七名の在住者がある。先般帰朝した小野会長の甥廻生廣君の如きも一萬数千圓を貯へ来ったといふ」¹¹⁾。

以上のような結果、昭和2年1月、大阪を中心に結成された、「旅の小野津人全部を以て会員となす」¹²⁾旅の小野津びと会の役員の中にも、7名¹³⁾ものアメリカ居住者が入っており、在米小野津人が幾何に多数いて、その持つ意味が幾何に大きいものであったかを示しているように思われるのである。

以上、小野津出身者が大阪へ出て船員になり、出稼ぎの目的で好景気の国アメリカをめざし、働いて金を持ち帰る者や、そのまま住み付く者などが生まれたことの概略が、理解されたと思う。

第2節 戦前帰国者の事例

そこで次に、こうした過程を体験した一人の人間のプロセスを追うことにより、その実態をさらに深く把むことに努めよう。その人は、吉内豊照氏であり、「年輪」にやや長文の「数々の想い出」と題する回想記¹⁴⁾を載せられているので、これを手掛かりとしたい。

氏は1909年生れで、15才で早町の高等科を卒業、父のすすめで、1年間農業をしたあと1925年4月上阪、やはり九条の小野昌雄氏宅に世話になっている。当時氏宅の二階では「船の免状を取る人達、上の学校に進学される方達、電車乗り免許を勉強する方達、志戸

桶、佐手久の方」など、「沢山の先輩達が勉強をして居る」という状況であった。彼自身は、船員の職探しのため、本田通りにあった福屋船員紹介所に、朝から午後4時頃迄毎日通い、4～5日程で運良く北九州の若松、戸畑と大阪間を結ぶ石炭船に給仕として乗船が決まった。半年程かけて船に酔わなくなってから、「大型船に乗り替え、外国航路を続けた御陰様で、世界の国々はずいぶん見て廻」ったという。

その間、郷里には時々帰って農業の手伝い、栈橋工事、砂糖の製造なども行ない、のちには「兄も“シスコ”や“ロス”で働いてから日本に帰り、神戸の元町で店を開いて、かなり繁盛していたので、私も船員生活を止めて兄の店の近くで喫茶店を始め、しばらくの間は良いと思うたが、何しろ船上りの素人」なので「一年半程で見事失敗」した経験もしている。

その後、一時帰郷してから直ぐ上阪し、それまでは「幾度か外国船に乗り替えましたが、中々私の思う様に目的地（アメリカ）には参りませんでした¹⁵⁾」という状態であったが、「日支事変の起こりし頃より船員も不足だったので今度は思う通りの北米航路の船に乗れた」のである。

1935年、オレゴン州ポートランド港に入港。「大きな長い角材を積み終り明日は日本に向け出帆と決まった夕方、十四、五人の船友達と上陸し、街を見物したり土産品等を買いたい人達とも別れ其の夜は友達の船で休み一晚中、目が覚めて眠れず、未だ夜も明けぬ五時頃に船をはなれ、英語の一言も話せぬのではほとんど手真似で、向う所はワシントン州シャトルに住む要常心氏の家なれ共、やっと探し当てるのに八時間もかかりました。」と氏は当時の状況を語っている。

アメリカでの生活については「就職する迄、しばらく御世話になってから、要氏の知人の紹介でシャトルの街で働く様になりましたものの、あちらの言葉が話せぬので非常に困り」、「早速知人が日本人の英語の先生を紹介し、仕事を終えてから毎夜一時間づつ個人教授で習い、半年位いで片言を覚え看板の字も少しばかり読める様になりました」と言う。また「私の就職した店から余り遠くない所に大きなビルの移民局がありまして、係官が時々来られて店のマスターと話している姿を裏の作業場から見ても胸のドキドキするのが止みませんでした」と密航後の不安な心境を語っている。

その後、「シャトルで一ケ年余り働き土地にも馴れて良い友達も出来たので、友達の兄を頼って一人でアラスカ行きの船客となり、アンカレッジの近くのピーターズバーグと言う街に落ち着き、五年程働いた」が、日本からのラジオ放送でどうも日米関係が悪くなるのを感じたので、アメリカを早目に引き揚げ¹⁶⁾て帰国の途につき、帰郷途中の「鹿児島の旅館で大東亜戦争が始まったラジオのニュースを聞いた」のであった。

以上、吉内氏の体験から、当時の小野津人の渡米の具体的な状況について、ある程度理解できたかと思う。なお、ここに登場した要常心氏については、後に詳しくふれるつもりである。

第3章 渡米者の動向

第1節 渡米時期、居住地および職業

まず、「郷土史」¹⁶⁾からわかる渡米者に関する事柄について整理しておこう。1938年時点における在米者の年齢分布では、30代の者が約3分の2で最も多く、40代の者が約3分の1でこれに次いでいて、20代の者はほとんどいない（第1表）。このことから、彼等の渡米時の年齢を諸般の事情からほぼ25才位と仮定すれば、1938年の約10年程前すなわち1920年代後半（昭和初期）に渡米した者が最も多い事になる。

第1表 在米小野津出身者の年齢分布（1938年）

年 齢		人 数	
40代	45～49才	3人	9人
	40～44	6	
30代	35～39	11	20
	30～34	9	
20代	25～29	1	2
	20～24	1	
合 計		31	31

資料：「郷土史」より作成

次に、アメリカにおける彼等の居住地をみよう（第2表）。不明者が多いが、わかっている12名の場所をみると、いずれも船の寄港地またはその近くであることがわかる。スタンフォードはニューヨーク北方、コネチカット州最南端の町で、ニューヨークから鉄道で約1時間のところであり、ニューヨークの一部を見ることもできよう。

第2表 在米小野津出身者の居住地

居住地	職業					計
	商 業	ホ テ ル	家 事	不 明		
シ ア ト ル				1	1	
サンフランシスコ		2	1		3	
ロサンゼルス	2			1	3	
ニューヨーク	3				3	
スタンフォード	2				2	
不 明			1	18	19	
計	7	2	2	20	31	

資料：「郷土史」より作成

さらに、職業について、やはりわかっている範囲でみると、商業関係に従事する者が多く11人中7人いる（第2表）。このうち、ニューヨークの中の2人は「toasted sandwich shop」、スタンフォードの2人はレストランでそれぞれ働いていることがわかっており、食品店関係で働く者が多かったようである。

第2節 渡米者数と渡米後の彼等の対応

本節では、渡米者の事情に詳しい東京在住の正岡五十一氏の話を中心に、「郷土史」や「年輪」等の文献資料の整理などからわかる事もつけ加えて、渡米者の動向についてより詳しい実態を扱いたい。筆者は正岡氏に氏の記憶している渡米者全員の氏名を書き出して

いただいたのであるが、渡米者に関する文献資料としては、上記2点の中に部分的に見られる程度であって、今のところ氏の話以上に詳しい資料は存在していない様である。

氏を書き出して下さった氏名は、小野津の字神宮が45名、字前金久が7名、合計52名であるが、この他に、神宮で5～6名、前金久で7～8名程名前の思い出せない人がいるという事であった。従って、これらを全部加えた総数約70名ほどの者がアメリカへ渡ったという事になる。

他方、「郷土史」からは1938年時点で、33名のアメリカ居住者がいる事を先にみた。このうちの2名はブラジル居住者なのでこれを除き、残りの31名と先の52名とを突き合わせてみると、52名の中になく、31名の方に出てくる者が5名存在した。さらに、「年輪」の中に、以上の合計57名以外のアメリカ居住者であると判明しうる者が4名確認でき、結局、総計61名の渡米した事のある者の氏名が明らかになった。

次に、正岡氏により判明した52名の人々を、A. 戦前に帰国した者、B. 戦後になってから帰国した者、C. 戦後も帰国せずアメリカに定住した者の3つに区分してみると、Aが33名、Bが8名、Cが11名となった（第3表）。すなわち、3分の2近くの多くの者が戦前に既に帰国しており、戦後まで残った者の中でも半分近くは、その後帰国したが、他方、約5分の1程の者が戦後も帰国せず、アメリカで永住権を取得して定住するに至ったという事である。また、戦後の帰国者の中には、終戦後間もなく帰国した者が多い様であるが、中には1960年代に帰国した者も含まれていることも注目されよう。

第3表 渡米者の対応

	人数	割合
	人	%
正岡氏記憶者	52	(100.0)
{ A 戦前帰国者	33人	(63.5)
{ B 戦後帰国者	8	(15.4)
{ C 定住者	11	(21.2)
「郷土史」による補足者	5	
「年輪」による補足者	4	
合 計	61	

資料：正岡氏より提供の資料、「郷土史」、「年輪」。

つぎに、主として山元速雄氏からの聞き取りから、彼等の渡米の目的やその後の対応についてみると、以下に見るように、いくつかのタイプがあった。当時のアメリカと日本との関係は、ちょうど最近の日本とアジアとの関係に似ており、アメリカで数年間でも働けば相当の金になるという状況であった。従って、彼等の渡米の目的は「移住」や「長期的なもの」ではなく、一定期間の「金もうけ」のための労働のあとは必ず帰国するというものがほとんどであった。従って、渡米後の対応でも、小金を貯めて戦前に帰ってくるというもの—タイプ①—が最も多かった。しかし、中には「ハダカで帰って来た」者—タイプ②—や、「帰ろうにも旅費がなくて帰れず、こちらから身内の者が迎えに行く」というような例—タイプ③—もあり、また、渡米後何年も生活するうちに「ボケてしまったり」し

て強制送還されたもの—タイプ④—もあったと言う。

さらに、戦後引揚げ船で帰された者—タイプ⑤—もあり、これもなかば強制的であった。また、先にもふれた様に戦後かなりの期間が過ぎたあと帰国した者—タイプ⑥—もいた。このほか、上陸はしたがまもなく捉まって送り返された者—タイプ⑦—もあったと言う。

定着した者—タイプ⑧—は、はじめは「金もうけのため」であって、いつかは帰国するつもりであったが、次第にアメリカの生活に慣れ、そちらの方が住み良くなり、アメリカでの仕事や生活も何とか成り立って定住するに至ったものが多い。しかし、中には、はじめから根を下ろすつもりで嫁を連れていった人もおり、後に詳しく述べる要常心氏などはこの例であった。¹⁷⁾

以上のように、渡米後の対応は8つぐらいのタイプに分けられるようであって、このうち①、②、⑦は戦前帰国した者に多かったし、③、④、⑤、⑥は戦後にみられたケースであった。また、①、②、⑥は自力で帰ってきた者であるのに対し、③、④、⑤、⑦は自分の意志にかかわりなく帰された者と整理することもできよう。

さらに、①の「小金を貯めて帰って来た者」のその後をみると、小野津で機織りを始めた人、鹿児島で下駄屋を始めた人、神戸や大阪で床屋を開業した人、¹⁸⁾ 東京で事業を始めた人など様々であり、中には貯えた金を事業にではなく、家を建てる資金に充てた者もいた。¹⁹⁾²⁰⁾

なお、彼等の大部分は皆結婚してから単身渡米しているのであり、日本に残された彼等の妻の苦労は大変なものであった事も忘れてはならない事であろう。

第3節 戦後帰国者の事例

先に、戦前帰国した吉内氏の渡米過程について、やや詳しくみた。本節では、戦後しばらくたってから帰国した例として、先のタイプ分けによればタイプ⑥に当る2人の事例を見よう。

1 前田文積氏の場合

その1人は前田文積氏である。氏は現在鹿児島に居住しており、95才の高齢であるが非常に元気である。以下、氏が他の多くの人々とちがって、なぜ戦後もアメリカに居住し続けることになったのか。また、なぜ帰国することになったのかなどの事をポイントにしつつ、氏の略歴をたどってみよう。²¹⁾ すなわち、1)出生、2)上阪、3)渡米、4)アメリカでの生活、5)戦後の生活、6)帰国、7)帰国後の生活、などについて見て行く事にしよう。

氏は1894年生れで、1905年3月、早町尋常高等小学校小野津分教場を卒業している。その後、子守や馬、牛、豚などの家畜の世話をしていたが、「親戚や隣り近所の者など皆が、アメリカからお金を送って来る」のを見て、自分も「百姓はいやだから、アメリカへ行ってひともうけしよう」と考えていた。1912年、18才のときに上阪、やはり他の出郷者と同様に「下宿屋」でもあった小野昌雄氏宅で2週間ほど世話になっている。1919年、25才で海軍々人の一人娘の前田家へ養子に入り、翌年長女、その2年後に長男が誕生。当時は横浜に居住し、船修理工場の食堂で働いていた。

1922年、長男の生れた年、28才で渡米、はじめサンフランシスコでホテル業をしていた、いとこの進実政氏を訪ねたが、のち、友人の多かったニューヨークへ。同年10月6日、ニューヨークに上陸、後述の保氏及び野島氏の経営するレストランで、主にコーヒ

ーづくりなどをして働いた。²²⁾1932年、38才の頃からは、マンハッタン116 st.の友人西兄弟達が働いていた「toasted sandwich shop」へも行き、「キャッシャー²³⁾が金をごまかすのを監視する役」を兼ねたテーブル係などをして数年間働いている。

この間、アメリカで結婚の話が2度程あったが、いずれも「no thank you」と言って断った。「横浜に子供がいて、アメリカで子供ができたらどうするか」というわけだ。又、この頃²⁴⁾、土曜日毎にあそびにさそわれたが、やはり「no thank you」であった。

行くときは「大望を抱いて出かけたが皆苦勞している」と氏は言う。とくに、太平洋戦争の始まる頃が一番大変で、「5セ²⁵⁾ンで3日すごした事もある。」「²⁶⁾チョーチに行けばただで食べられたが、タダのメシはいただかない」。この頃「着のみ着のまま」で日本に帰った者もいたが、彼等は「週1回の給料を競馬に費したり、酒をやったりしたため」であり、また、「女につき込²⁷⁾」んだ等のためであった。しかし、戦争開始直後、敵国人であったにもかかわらず「ニューヨークの日本人レストランは1週間休んだだけで、その後すぐオープンできた」事は幸いだった。

戦前の生活については、大体以上である。終戦2年後の1947年8月8日、始めてアメリカから仕送りをした。まずはじめは、喜界島のお母さんに、次に横浜の妻子に仕送りをした。さらに、「子供の頃おぶってくれた『ねえさん』と呼んでいた人」や、「お金を取らずに世話してくれた人」²⁸⁾には、郷里へふとんを1枚ずつお礼として送った。「恩を忘れない」こと、「正しく（正直で勤勉に）強く²⁹⁾（健康に）生きる事」が、氏の信念である。「人は酒を飲んでよろよろして帰ったり、また映画へ行ったりしていたが、私にはそういう余裕はなかった。金があれば送った」。また、「美人と言うも顔のわざなり。骨かくす顔にて誰にも迷いけん」を実行してきた。「顔や体格で区別する必要なし」と言うわけだ。

1962年、68才で氏は日本に帰国する。28才で出国以来40年ぶりである。奥さんは既に亡くなっており、「正しく、強く」を信念とする氏にとって、「南家から前田家に行ったからには、線香1本もあげなければという気持」も、帰国の理由の一つであった。横浜の息子や娘等の家で半年程居住。その後鹿児島に帰り、夫に死別し名瀬で旅館業をしていた現在の奥さんと結婚、市内三和町に住んだが、1965年の大火にあい、現在の新栄町へ³⁰⁾。

帰鹿して27年たつ今でも、食事はごはんは食べず、「オートミール」、「ソーダクラッカー」「パン」それに「コーヒー」で、肉食が中心、魚は週1回である。コーヒーは自分で豆を挽いて飲み、「お茶を飲むと眠れない」。また、部屋の中でも畳には座らず、椅子とベッドの生活で、針の目も自分で通すし、西鹿児島駅³¹⁾まで買い物にも行く。酒は週2回焼酎に砂糖を入れて飲み、タバコはハイライトを1日10本、3分の2ほどまで吸う。「食事はゆっくりと時間をかけてとり、食後15分間は座っている」という父の言葉を守り、間食も取らない。これからも「我こそは日本一の長命であることを希望して」おり、早朝の「きかい体操³²⁾」なども行なっている。生活費は「今だにアメリカ政府から、市民権をとらなかったにもかかわらず、毎月7～8万円の送金があり、日本で結婚した奥さんにもこの半分はくる」し、日本の年金もあるので、何とか暮らして行ける。

以上、氏の生活史をみたが、アメリカでの生活をふり返って氏は、自分個人の人生としては「日本に帰っても hard work をしなければならなかったであろう事を考えると、楽しく、気楽に生活できた」と述べる反面、戦前は「帰ろうと思ったが帰ろうにも帰れなかった」状況であり、その後も「いつかは帰るという事は忘れなかった」と言い、また、「40年間気持ちはいつも同じ」であったとも述べて、日本に残した妻子のことにふれている。ここには、個人の対応もさる事ながら、当時の喜界島の置かれた歴史的、地域的諸条件について、深く考えさせられるものがある。

なお、氏の推測によれば、このようにして渡米したものは、小野津から約80名³³⁾、喜界島全体では90名ほどになり、小野津以外では、例えば湾出身の渡清志氏やタカスケ氏、清政子氏、タダスケ氏などがアメリカにいたことがある。また、小野津出身者のうち約60名がニューヨーク、約20名がカリフォルニアに居住していて、当時はニューヨークの方が多かったようだ。

2 保時雄氏の場合

次に、保時雄氏について簡単にふれたい。氏は1894年³⁴⁾3月生れで、やはり大阪へ出て船乗りになっている。20代の頃、「ヨーロッパで郵便局員などもした」³⁵⁾が、1925年（氏が29才の）頃渡米し、「船に乗りおくれ」³⁶⁾アメリカに残った。戦前はコネチカット州でレストランを経営し、一時は数十人を使うほどかなり繁盛したが、日米開戦後はうまくゆかず、戦後は後述の野島氏のレストランで働くことになった。この間、アメリカ人女性と結婚し、2人の子供が誕生した。³⁷⁾

1965年から68年（69～72才）の頃何度か日米間を行き来したが、結局1968年日本へ帰国する事になった。29才で渡米して以来、実に四十数年ぶりの事である。その後、1971年（75才）に現在の奥さんと結婚、鹿児島に居住していたが、1977年、81才で亡くなっている。

以上の様に、氏は事業家であり、戦前に一時は繁盛したが、アメリカで結婚したためか戦後も居残り、1960年代の後半、70才を過ぎてから帰国している。本人が既におらず、主に鹿児島在住の夫人からの間節的な聞き取りであるため、詳細は不明である。

第4章 定着者の諸活動

第1節 アメリカにおける集団形成

1927年1月、大阪を中心に、全ての小野津出身者の組織である「旅の小野津びと会」が結成された事は、別稿でみた。この役員の中にアメリカ在住者が入っており、しかもその数が全役員28名中7名と実に四分の一もの多さなのである。³⁸⁾このことから、当時すでに渡米者の中で相互の連絡等が行なわれていた事が予想されるのである。

以下の文章は、奄美出身者による集りが持たれていた事を伝えている。「在米同胞西海岸至る處に発展し、殊に郡出身者も多数あり、ホテル営業の進氏（喜界村小野津）、口市に於ては自動車営業寶氏（喜界）を出し、殆ど奮闘の士ばかりにて候、時々会を催し意見の交換を行ひ、時に総出動でピクニックに出かけ円満にスイートホームの一群を作り居り候」。³⁹⁾

この文章からは、会やピクニックを行なっていた出身者の範囲が、小野津だけなのか、

喜界島全体か、または奄美全体かについては不明であるが、いずれの形にせよ似た様な会が行なわれ、奄美出身者が集まっていた事だけは確かである。

次にここで、戦後、1950年代の在米居住者について見ておこう。正岡五十一氏の記憶による渡米定住者は、先にみたように11名であったが、氏があげた11名の他に、もう1名の在米居住者が次の事から判明する。「年輪」の中に次の文章がある。「三代会長、野島元輔氏が、在米中の実弟、野島淳三氏に諮り要常心、保時雄、前田文積、梢喜美順、津田兼志、⁴⁰⁾盛文積、六氏の浄財に依って、青年部のユニフォームが調整され、…」⁴¹⁾この文章の筆者は、大阪の「旅の小野津びと会」の当時幹事長であった忠岡義一郎氏であり、この6氏が当時アメリカに居住していた事はたしかであろう。このうち梢氏は、正岡氏の記憶する11名の中に入っておらず、彼も当時の在米居住者につけ加わる事になる。

以上の12名の他に、先にみた60年代になってから帰国する、保、前田両氏を加えて、少なくとも14名の者が⁴²⁾1950年代のアメリカ居住者であった。

彼らがとくに戦後、どのように彼等同士の間での活動を行っていたかについては、詳しくはわからないが、野島ムツ子氏⁴³⁾によれば、ニューヨーク近辺の者同士では、時々野島順三氏のところで集まっていたようである。

1975年出版の「年輪」には、「アメリカ小野津会」名簿として8名の名前がある。これを整理すると、東部5名、西部2名、中部1名⁴⁴⁾となっており、やはり東部のニューヨーク周辺の居住者が多くなっている（第4表）。野島氏のところに集まった人達も、これらの東部の人々が主だったであろう。しかし、1980年代に入って以後、高齢のためこれらの会員も次々と亡くなり、野島氏自身も1983年に亡くなって、ニューヨークを中心とした以上の様な活動も衰退していった。1989年、筆者訪問時における東部での一世の生存者は、後に述べる要氏1人のみであった。

第4表 アメリカ小野津会員の居住地

	州	人数	備 考
東部	コネチカット	3人	野島順三（1906）、盛文助（1907） 滝長一（1904）
	ニューヨーク	1	津田兼志（1904）
	ペンシルバニア	1	要常心（1893）
西部	カリフォルニア	2	清田政隆（1902）、南実義（1907）
中部	ミズーリ	1	松原一成（?）
	計	8	

資料：「年輪」317～318 p.より作成

しかしながら、その後、カリフォルニア州で、小野津出身の清田政隆氏、上園田徳市などが中心となって「喜界島会」が1978年6月頃つくられ、ロサンゼルスを中心に10名程の者が集まって友好を深めているのであり、小野津会の流れは現在でもなお続いていると言えよう。

第2節 定着者の life history

本節では、戦前渡米し、戦後もアメリカでの事業に成功して定住し続けた2人の人物を

取り上げ彼等の人生のプロセスを明らかにしてみたい。その1人は要常心氏であり、もう1人は野島順三氏である。既述のように、野島氏は1983年になくなれたが、要氏はフィラデルフィア郊外で健在である。以下、誕生、出郷、渡米、終戦、戦後の生活、日本との関係等について、順次みていくことにする。

1, 要常心氏の場合

氏は1893年1月生れであるから、1989年現在96才である。1911年、18才で上阪、「インドやシンガポールなど海外をみたくて」船乗りになる。1913年、20才のとき「金もうけのため」はじめてシアトルへ、このときは少し働いて帰っている。当時のアメリカは、第1次大戦前の好景気で、収入が日本の倍であったというから、丁度今の日本とアジア諸国との関係に似ている。1924年、氏が31才の時に、日本からの最後の移民船「三島丸」で渡米するまで合計5回日本に帰っており、20代の頃は日米間の行き来を繰り返していたのである。

アメリカへ来るときの仕事はみな、商船の船乗りとしてであった。この間、1923年、30才の時に同じ小野津出身者と結婚⁴⁵⁾、夫婦で渡った最後の移民船は氏にとっては6回目の渡米であった。以後、太平洋戦争までの20年間、最初の渡米から数えると30年間（20才のころから50才までの間）を、氏はシアトルで過ごすことになる。この間の仕事は、「Railroad（鉄道工事）か Sawmill（製材）か Farming（百姓）」などであり、不景気で仕事のない時がいちばん苦しかった。

こうした仕事をしているうち、1929年（36才）頃には「Itarian farmer」のところで働くようになり、1942年（49才）頃、ようやく独立して百姓を行うようになった。しかし、その途端、日米開戦のため1942年9月から終戦までの3年間、カリフォルニアのキャンプに入れられる。

1945年、52才の時、「パパとママの親戚が多かったので」⁴⁶⁾東部のコネチカットに移り、1946年頃からペンシルバニア州の白人の百姓の下で3年半ほど働き、1949年、56才のときに、現在のペンシルバニア州、Gren Sideの家と土地とを購入した。当時2人の日本人1世の人が働いていたが、所有者の白人がここを売るという事だったので、当時の金で4万5千ドルを支払って、1町3反の土地と石造りの家を手に入れ、グリーンハウス業を引き継ぎ、現在に至っている。⁴⁷⁾

日本との関係では、1970年（77才）、沖縄海洋博のとき、その見物を兼ねて日本に帰っており、つい最近の1985年（92才）にも、3女と孫とともに喜界島へ帰っている。このときの島の人達の歓迎ぶりは、言い様のない程のものであった。また、1984年には、氏の在米60年記念の年なので皆が集まり、日本からも夫人の弟である正岡五十一氏が渡米、参加している。

この間、「みなシアトルで生まれた」⁴⁸⁾10人の子宝にめぐまれ、現在8人がそれぞれアメリカ社会にとけ込んで生活している。すなわち、氏と一緒に長女、3男、7女の3人が、ロサンゼルスに4女、6女、2男の3人が、そしてミネソタに2女、イリノイに3女がそれぞれ住んでおり、父親のところの仕事が忙しい時には、2女や3女は手伝いに来るのである。

以上みたように、シアトル当時は「子供が多く、生活は大変だった」。また、東部へ来てからも最初は家族が「皆で一緒に住めず、おばさんと子供達のほとんどは、遠くの別のところに住んでいた」⁴⁹⁾状態であった。しかし、現在は1町3反の広い敷地とその一面に建つ、亡くなった長男がつくった3つの温室を備えた立派なグリーンハウス業を、3男が中心になって経営している。

氏によれば、はじめシアトルに来たときに不景気で仕事がなかった時と、1949年頃に食物がなかった時とがいちばん苦勞した時であった。

2 野島順三氏の場合

氏は1906年3月5日生れで、12才で小野津小学校を卒業後、やはり大阪へ行き船乗りになっている。船員時代は船のコックの下で働き、シンガポール、ポートサイド（地中海）など世界各地を貨物船でまわっている。

1926年10月10日、氏が20才のとき渡米、友人のコウスケ氏と2人でやはり船から離れてニューヨークに上陸、ブロードウェイで宝石店を経営する広島県出身の鎌田氏の名刺をたよりに氏を訪ねたが、あいにく店が閉まっており、⁵¹⁾その夜は隣のクラブでとめてもらう。翌日、店が開くのを待っている時、日本人の運転手が来て、ブロードウェイのミール教会でハウスボーイとして働くことになる。ここは4カ月で逃げ出し、その後も洋食店、ゴルフクラブ等で働いたあと、1932年、26才のとき、K・永井氏と共同で、K & J レストランを、ニューヨーク市北郊、コネチカット州スタンフォード市に開店した。永井氏は氏よりも早くアメリカに来ていて、年も上であり、英語もできたので相棒として選んだが、金がたまると競馬などのギャンブルをして遊んでくるので、後に彼にはやめてもらい、一人で経営することになった。戦時中は警察などの助言で一時は店を閉めたが、4日間の休業の後、5日目には店を開き、しばらくの間は客が来なかったが、やがて顧客がもどってきて徐々に回復し始めた。⁵²⁾戦時中も敵国の人間が営業を続ける事ができたのは、この地ならではの事であろうか。この間、ドイツ系の夫人と結婚し、⁵³⁾2女を育てている。

戦後、次第に店は繁盛するようになり、「店の休業日には町がさびれる」と言われる程までになった。朝6時から夜中の12時まで、12～3人の従業員が3交代で営業した。隣の隣が郵便局で夜中に働く人もおり、彼等は朝5時頃から、表は閉まっているので裏から入って来てカウンターに座り、「自分達が食事をするひまがない」⁵⁴⁾程であった。

1971年、65才で年金がもらえるようになり、店を閉じたが、この間、1957年、51才のとき「自分のレストランを繁盛させてくれた市民への恩返しとして、自分の家の近くを流れる Mill River 両岸の公園に、100本の桜苗を寄贈している」⁵⁵⁾これを契機に、市民が各地で桜の木を植えるようになり、スタンフォード市は「桜の町」として有名になった。また、1966年、氏が60才のとき、筆者が面会したムツ子氏と結婚している。

日本とのかかわりについてみると、働き始めてから貯金が100円貯ったとき、このお金と自分に関する情報とを、はじめて郷里の小野津へ送っている。この時までは船会社が彼を探しているのを恐れて何もしなかった。その後も郷里の公民館や図書館に、まわりの同郷人からも金を集めて援助したり、⁵⁶⁾大阪在住の出郷者からなる「旅の小野津びと

会」に対しても、前述のようにユニホームなどの寄贈を行なっている。また、店を開めた後、氏は昔の郷里の苦しみを知っていたので、「皆のため」という気持ちもあって、指宿に4反(1200坪)の土地を購入し、皆が泊まれる広さの3階建の家を建てたが、氏は1カ月程暮らした後、やはり生活があわなかったためか再びアメリカに戻り、この家や土地ものちに売ってしまう。

1983年1月21日、77才で亡くなるが、翌年には、桜の花咲く公園の一角に、氏の功績を称える石碑がつけられた。

以上のように、氏は1932年(26才)から1971年(65才)までの約40年間、レストランの事業を成功させ、また、スタンフォード市に対して公共的な奉仕を行なうと同時に、郷里小野津やその出身者のためにもいろいろと尽したのであった。

第5章 まとめと若干の考察

以上みたような渡米者とりわけ定住者の行動が、どのような意味をもったのかについて2～3考えてみたい。

第1は、彼等自身の、未知の世界へとび込み、そこで生活を切り開いてゆくという積極性、開拓者精神が高く評価されなければならないと思われる事である。同時にこの過程は、退職後一度帰国した後まもなく再び渡米した野島氏の場合が良く示しているように、自分自身の変革、アメリカ化をも伴うものであった。

第2は、彼等の行為が、日本国内在住者とりわけ他の小野津出身者を刺激し、励まし、勇気づけたと思われる事である。同時に、同胞の海外での活躍は、国内居住者の視野を広げる意味を持ったであろう。

第3に、長期の在米生活によって、彼等は子孫をアメリカに残したという事である。彼等の2世や3世達は、今後も日本とのつながりを持ち続け、日米両国人の友好の担い手となるであろう。

第4に、彼等の行為が、戦中、戦後生まれの若い人々の渡米やその後の定住の精神的支えや実質的な足がかりを作ったという事である。後に続く若い人達にとって、彼等はその基礎を作った人達ということになろう。

戦前の渡米者が意識していたか否かにかかわらず、結果的には、彼等の渡米、定住の行動は、以上のような意味を持ったと言うことができよう。

つぎに、本稿を作成する過程で、いくつかの問題が浮かび上がってきたが、ここではとくに、小野津の人達の集団的結合の問題、すなわち、なぜ彼等は結束が強いのかという問題について、若干の考察をしておこう。結論から言うと、彼等の集団は1つの家族あるいは親戚集団のようなのである。すなわち血縁的な結びつきが強く、それ故か父母や祖父を大切にする。あるいは先祖を大切にすることから、そこにつながっている者同士、親戚・親類関係を大切にすることのかも知れない。いずれにせよ、このような血縁的なつながりの強いことが、彼等の結団力の一要因であることはたしかであろう。以下、こうした側面に関するいくつかの事実をあげてみよう。例えばA氏は次のように言う。「食事は先祖に、先に死亡した友人にあげてから食べる」、「父母、先祖に感謝しつつ……」、「祖先だけには正しく……」。こ

こには、氏の先祖を敬う気持ちがはっきりとあらわれている。

また、B氏は自分の結婚の相手を決める際に、次のように述べている。「私のおばあちゃんがM家（今度結婚する夫の先祖）からK家（現在の自分の祖父の家）へ来ている」と。すなわち祖母が夫と同筋であることが、結婚を促進させる一要素になっているのである。このことは「最近はちがってきたが、かつては結婚も小野津人同士であった」というC氏の言葉からも裏付けられよう。

さらに、小野津出身者と結婚した他県出身のD氏によれば、「小野津の人同士はガッチリ」固まっており、「小野津の人だけが内、私なんか女房でも外」となるのである。

このほか、郷里の学校や公民館に対する出郷者からの寄付がしばしば行なわれてきた事、出郷者の会では必ず敬老会が行なわれ、むしろこれが中心行事にすらなっている事、何かの事で出郷者の住む地区へ行くと直ちに多くの人が集まることなどの事実があり、これらの事はいずれも彼等の集団を一つの親族と見ればよくうなずける事のように思う。

しかし、この側面は彼等の結びつきの強さの一つの要素にすぎないかも知れない。近年は他郷の人との結婚も多く、また、出郷地で育った2・3世は出郷者の会である小野津会等にはあまり関心を示さないとの声もきく。こうした現象をどのように捉え、整理していくかという事なども、今後の課題となろう。

謝 辞

本論文作成に当り、鹿児島在住の前田文積氏、保氏夫人、東京在住の正岡五十一氏、山元速雄氏、アメリカ在住の要常心氏、二女の本多ゆり氏、野島ムツ子氏などの方々にたいへん世話になった。とりわけ正岡五十一氏には、筆者の渡米前後再三に渡りアメリカ在住者に関する情報の提供、関係者の紹介、文献の寄贈など多大な協力をいただいた。また、アメリカ滞在中は Charles & Teruko Pace 御夫妻にも研究遂行上の便宜を計っていただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 拙稿（1989）：郷友会形成母村の研究—鹿児島県瀬戸内町の場合—。鹿児島大学教育学部研究紀要，40巻，25～47 P，拙稿（1983）：甌島における過疎化と転出者の集団形成。鹿児島大学教育学部社会科学教室編，「鹿児島の地域と歴史」，111～137 P。拙稿：奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成—喜界島小野津の例を中心に—。鹿児島大学教育学部研究紀要41巻，印刷中。
- 2) アメリカへの移住は，この他広島県，和歌山県など多いようである。相賀溪芳（1953）：五十年間のハワイ回顧，「五十年間のハワイ回顧」刊行会。ハワイ日本人移民史刊行委員会（1964）：ハワイ日本人移民史，布哇日系人連合協会などを参照。また，統計類については，「大島郡統計書」が明治41年より大正9年まで発行されているが，その後がなく，大島郡出身者のアメリカ等への移住者が多かった大正末期から昭和初期（1920年代）の実態は把握できない。なお，参考までに大正9（1920）年の海外移住者数は，郡全体で「台湾・朝鮮・樺太」が男882，女415，「外国」は男192，女52であり，この「外国」の先行は不明である。この「外国」移住者のうち郡内の市町村別では，「宇検村」の91（男女計，以下同じ）がとくに多く，次いで「早町村」の28，「和泊村」の26などが多い方である。
- 3) 拙稿：奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成，前出注1)参照。
- 4) 本書は「旅の小野津びと会」が1975年に発行した，同会五十周年史（非売品）である。
- 5) 山元正宜（1975）：私の五十年。「年輪」所収，192 P。
- 6) 吉内豊照（1975）：数々の思い出。「年輪」所収，176 P。なお，「アメリカ行く」は「アメリカへ行く」の誤りであろう。
- 7) 前掲注4)，192 P。
- 8) 山元速雄氏からの聞き取りによる。
- 9) 同 上
- 10) 竹内譲（1969）：喜界島の民族，黒潮文化会，11 P。
- 11) 「奄美大島」，1927年1月号，23 P。武山信夫（1983）：月刊誌「奄美大島」縮刷版，上巻，奄美社131 P。句点は筆者挿入。なお，「小野津出身」は「小野津出身者」，「丈けにも」は「丈けでも」の誤りであろう。
- 12) 結成当時の——族の小野津びと会会則，第三条。「年輪」，40 P。
- 13) 文園彰（1975）：心に風が吹く。「年輪」所収，32～33 P。
- 14) 「年輪」167～181 P。以下の引用はこの部分からである。
- 15) （ ）内は筆者挿入。
- 16) 文園彰編（1939）：郷土史（非売品）。なお，1980年代に「郷土史」復刻版が5名の発行責任者により企画，発行された。
- 17) しかし，氏の場合も，はじめ「金もうけ」のために何度か渡米しており，最後に定住の目的で，奥さんを連れて，「日本からの最後の移民船で」渡米したのである。
- 18) M. Y 氏。
- 19) Y. T 氏および N. Y 氏。
- 20) S. S 氏。
- 21) 以下は，氏からの聞き取りによる。
- 22) とくに「野島氏にはずいぶんつくした」と，当時を振り返って述べている。

- 23) 現金を扱う人、現在のレジ係のこと。
- 24) とくに氏が33～34才の頃である。
- 25) 5セントのこと。パン1つが1セント、ジャガイモ1つも1セント、肉1切2セントだったという。
- 26) 教会のこと。
- 27) この部分は山元速雄氏の話による。
- 28) 送った時点で、彼女は88才だったと言う。
- 29) このためか、氏は葉ざらい、医者ざらいであり、まわりの者が医者をすすめても「No」である。
- 30) 三和町のすぐ隣町である。
- 31) 片道、徒歩5分とバス30分程の距離である。
- 32) ラジオ体操のことであろう。
- 33) 前述のように、正岡氏によれば約70名である。
- 34) ききとりの際、保氏夫人から明治29（1896）年3月29日生まれと聞いたが、前田文積氏からは同級生と聞いており、「郷土史」でも同期の卒業なので、1894年生まれかと思われる。
- 35) 保氏夫人からのききとり。
- 36) 恐らく、当時の他の人の例と同様に、意識的ではないかと思われる。
- 37) このうちの1人、Marry Sandersさんに、筆者は1989年3月、Stanfordの野島ムツ子氏宅で面会した。
- 38) 顧問6名中1人、幹事19名中6人であり、他の役員は会長と2名の副会長である。
- 39) 伊集院達（1926）：在米の郡同胞、「奄美大島」、1926年7月号、25～26P。武山信夫（1983）：月刊誌「奄美大島」縮刷版、上巻、奄美社、78P。
- 40) 文助の誤りである。
- 41) 忠岡義一郎（1975）：平々凡々五十年 私の年輪。「年輪」所収、162～163P。なお、「淳三」は「順三」の誤りであろう。
- 42) ここで1950年代としたのは、忠岡氏が幹事長になったのは1953年からであり、前田氏の帰国は1962年であるから、少なくともこの間という意味である。
- 43) 野島順三氏夫人
- 44) 他の7名がいずれも戦前に渡米した高齢者であるのに対し、中部の1名の場合は、戦後、鑑別士として渡米したものである。居住地はセントルイスである。
- 45) 正岡五十一氏の姉、スエマツ氏である。
- 46) 二女、ゆりさんからの聞き取り、彼女はミネソタ州に住み、グリーンハウス業が忙しい3月、5月、12月の年3回、2週間づつ父のもとへ手伝いにやって来る。筆者が要氏宅で面会したのは3月のときである。なお、彼女は兄弟の中では日本語がいちばん上手である。
- 47) 家と土地を買うとき皆で見に行き、やる気を出した。その後長男は花づくりの勉強のため大学まで行き、夜も12時まで働いて、借金も2～3年で全部返済した。
- 48) 1944年生れの3男Roy氏と1947年生れの末子で7女のジュリ氏を除いてであろう。
- 49) スエマツ氏と親しかった近所に住む日本人の友人、浜子さんからの聞きとり、「日本語が上手」（二女ゆりさんの話）なので筆者のためにわざわざ来て下さった。
- 50) 夫婦で来た1924～5年頃のことである。

- 51) アメリカでも日本と同じように店の裏に住んでいるものとばかり思っ、表をドンドンたたいたという。夫人が聴かせて下さった氏の生前のテープによる。
- 52) 「The ADVOCATE」。1983年1月22日号。
- 53) その後、彼女とは離婚している。
- 54) 野島ムツ子氏による。
- 55) 「米国日系人百年史」, 1961年, 1390 P には, 「1956年」とあるが「STANFORD ADVOCATE」, 1957年4月27日号には100本の桜の苗を贈呈した時の写真があるので, 年は1957年であろう。また, 上記「百年史」では, 市公園のほか「学校, 図書館等」にも寄贈し, 合計200本としている。
- 56) 前掲注55), 「米国日系人百年史」1390 p。

文 献

- 文園彰 1980. 郷土史, 復刻版. 364頁, 東京. [HUMIZONO, A. 1980. Local Histoty, reissue ed. 364pp, Tokyo.]
- 加藤新一 1961. 米国日系人百年史. 1432頁. 新日米新聞社, ロサンゼルス. [KATO, S. 1961. A Hundred Years History of Japanese American in U.S.A. 1432pp. New Japanese American News, Inc., Los Angels.]
- 旅の小野津びと会結成五十周年記念編集委員会 1975. 年輪. 329頁. 旅の小野津びと会, 大阪. [TABINO ONOTSUBITOKAI 1975. Growth Rings. 329pp. Tabino Onotsubito-kai, Osaka.]
- 田島康弘 1983. 甌島における過疎化と転出者の集団形成. 「鹿児島県の地域と歴史」(鹿児島大学教育学部社会科教室編) 111-136, 鹿児島. [TAJIMA, Y. 1983. Depopulation in Koshiki Island and Group Formation of Emigrants in Urban Area. Region and History of Kagoshima 111-136, Kagoshima.]
- 田島康弘 1989. 郷友会形成母村の研究—鹿児島県瀬戸内町の場合—. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 40: 25-46. [TAJIMA, Y. 1989. A Study of Mother Village Whose People Organize in Association in Urban Area—A Case Study of Setouchi-cho, Kagoshima Prefecture—. Bulletin of the Faculty of Education Kagoshima University, 40: 25-46.]
- 田島康弘 印刷中. 奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成—喜界島小野津の例を中心に—. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 41. [TAJIMA, Y. in press. Migration of Amami People and their Segregation in Tokyo — in Case of Onotsu Village, Kikai Island—. Bulletin of the Faculty of Education Kagoshima University, 41.]
- 竹内譲 1969. 喜界島の民族. 270頁. 黒潮文化会, 東京. [TAKEUCHI, Y. 1969. Folk Customs in Kikai Island. 279pp. Kuroshio bunka-kai, Tokyo.]
- 武山信夫 1983. 月刊誌「奄美大島」縮刷版. 881頁. 奄美社, 鹿児島. [TAKEYAMA, N. 1983. Amami Oshima, reduced-size ed. 881pp. Amami-sha, Kagoshima.]

(Accepted November 6, 1989)